Dog and Man and Flower

There lived a priest and a brown dog in a lonely temple at the edge of a town.

The priest chanted a sutra there every day. It was so silent around the temple during the day and the night. The dog was already so old. He was so obedient and clever that he understood everything the priest said, though he couldn't speak.

The brown dog was listening to the sutra every day that the priest chanted on the step of the temple, laying on his stomach quietly. The priest was never negligent of his duty. The dog was always listening to the sutra with his eyelids closed when the priest was chanting it.



Spring came and passed in the grounds of the temple several times. The life of the priest and the dog never changed.

One day, the priest said to the brown dog,

"You got old. So you'll go to the heaven soon. I'm always asking the Buddha that you'll be born again as a virtuous man in the next world. You also should ask the Buddha well about it. Maybe you'll be reborn in thirty years."

The dog nodded to him and shed tears.

After few years, the priest and the dog passed away.

Thirty years, fifty years and seventy years passed. This world completely changed. There lived an old man in a village. He had a small mole under his eye and he was so fat. He walked with tottering steps like a pig.

He never got angry. He was always smiling and puffing at a pipe. He was so idle that he did nothing, but he was given things to eat.

"Old man, I harvested the beans. Please eat them."

"Old man, I brought sweet potatoes. Please eat them."

"Old man, if there is something you need, please tell me. I'll bring anything." Several people in the village visited him. They felt happy when the old man received whatever they brought. He was so loved by them.

When he heard of the quarrel that the young had had in the village, he went there with a pipe in his mouth totteringly. Seeing his smiling face with a mole under his eye, the young couldn't help smiling, even if they was so angry.

When the old man walked by the villagers who were so tired, he said to them. "It's a nice day. You are hard workers, aren't you?"

They felt refreshed and started working again.

The old man was very important person in this village. It was always peaceful with him. He was a good partner not only for the young but also the children.

The old man was, however, rich. He was only given things to eat by others. And he shared them to even beggars and travelers.

One day, a villager came to the old man's garden with vegetables he harvested in his farm.

"Old man, please eat this."

The old man was in poor spirits at that time and he said, shaking his head slightly. "I don't need anything."

The villager felt uneasy about the old man.

The next day, the old man felt ill and died of old age on his bed. The villagers felt great sorrow for the loss of the good old man. They performed a great memorial service for him.

"He was really a virtuous old man loved by everyone."

Every villager spoke well of him.

Twenty and thirty years passed again. The cherry tree which had been planted near his grave grew up and came into full bloom every spring.

One day in spring, a candy seller had an open-air stall under the tree. The balloons tied to the stall drifted in the air and a small flag was been blown by the wind.

A several children, five or six-year-old, bought candies. On their heads, the cherry blossoms were fluttering in the wind.(Original by OGAWA Mimei: 2024.4.13 by Kudo)

犬と人と花

ある町はずれのさびしい寺に、和尚さまと一ぴ きの大きな赤犬が住んでいました。そのほかに は、誰もいなかったのであります。

和尚さまは、毎日お堂に行ってお経を上げられていました。昼も夜も、あたりは火の消えたようにひっそりと静かでありました。犬もだいぶ歳を



とっていました。おとなしい、聞き分けのある犬で、和尚さまの言うことは何 でもわかりました。ただ、物が言えないだけでありました。

赤犬は、毎日お堂の上がり口におとなしく腹ばいになって、和尚さまのあげるお経を熱心に聞いていたのであります。和尚さまは、どんな日でもお勤めを怠ったことはありません。赤犬も、お経のあげられる時分には、ちゃんと来て、いつものごとく瞼を細くして、お経の声を聞いていました。

お寺の境内には、幾たびか春が来たり、また去りました。けれど、和尚さまと 犬の生活は変わりがありませんでした。

和尚さまは、ある日赤犬に向かって、

「おまえも歳をとった。やがて極楽に行くであろう、私はいつも仏さまに向かって、今度の世には、お前が徳のある人間に生まれ変わってくるようにお願い申している。よく心で、仏さまに、おまえもお願い申しておれよ。おそらく、

三十年の後には、おまえは、またこの娑婆に出てくるだろう。」と言われました。 た。

赤犬は、和尚さまの話を聞いて、さもよくわかるようにうなだれて、二つの目から涙をこぼしていました。

数年の後に、和尚さまも犬も、ついにこの世を去ってしまいました。

三十年たち、五十年たち、七十年と経ちました。この世の中もだいぶ変わり ました。

ある村に一人のおじいさんがおりました。目の下に小さなほくろがあって、丸々とよく太っていました。歩くときは、ちょうど豚の歩くようによちよちと歩きました。

おじいさんは、かつて怒ったことがなく、いつもにこにこと笑って、太い キセルで煙草をすっていました。そのうえ、おじいさんは、体が太っていて働 けないせいもあるが、怠け者で何にもしなかったけれど、けっして食うに困る ようなことはありませんでした。

「おじいさん、今年は豆がよくできたから持ってきました。どうか食べてください。」

「おじいさん、芋を持ってきました。どうか食べてください。」

「おじいさん、なにか不自由なものがあったら、どうか言ってください。何で もしてあげますから。」 いろいろに、村の人々は、おじいさんの所にやってきました。そうして、 おじいさんがもらってくれるのをたいへんに喜んだほど、おじいさんは、みん なから慕われていました。

村で若い者が喧嘩をすると、おじいさんは太いキセルをくわえて、よちよちと出かけて行きました。みんなは、おじいさんの目の下のほくろのある笑顔を見ると、どんなに腹が立っていても急に和らいでしまって、その笑顔につりこまれて自分まで笑うのでありました。

また、村の人々は、どんなに働いて疲れている時でも、おじいさんが、そ こを通りかかって、

「いいお天気でございます。よく精が出るのう。」と、声をかけられると、 人々は急に晴れ晴れした気持ちになって、また仕事に取り掛かったのでありま す。

おじいさんは、この村では、なくてはならぬ人になりました。おじいさん さえいれば、村は平和が続いたのであります。おじいさんは、若者の相手にも なれば、また子供らの相手となりました。

けれどおじいさんは、べつに富んではいませんでした。食べることに困らなかったというまでであります。そうして、乞食や、旅人の困るものには、何でも余ったものを分けてやりました。

ある時のことです。村人は、畑から取れたものを持って、おじいさんの庭 先へやって来ました。

「おじいさん、これを食べてください。」と言いました。

いつものごとく、にこにことして煙草をすっていたおじいさんは、その日にかぎって、常より元気なく、

「もう、私は何にもいらないから。」と答えて、軽く頭を振りました。

村人は、どうしたことかと心配でなりませんでした。

そのあくる日、おじいさんは気分が悪くなって床に就くと、すやすやと眠るように死んでしまいました。いいおじいさんをなくして、村人は悲しみましたそうして、ねんごろにおじいさんを葬って、みんなで法事を営みました。

「本当に、誰からも慕われた徳のあるおじいさんだった。」と、人々はうわ さしました。

また、二十年たち、三十年たちました。おじいさんの墓のそばに植えた佐浦の木は大きくなって、毎年の来る春には、いつも雪の降ったように花が咲いたのであります。

ある年の春ののどかな日のこと、花の下に飴売りが屋台をおろしていました。屋台に結んだ風船玉は空に漂い、また、立てた小旗が風に吹かれていました。そこへ五つ六つの子どもが三、四人集まって、飴を買っていました。

頭の上には、花が散って、ひらひらと風に舞っていました。 (原作:小川未

明)